



入院しながら学習する子どもたちのために

突然の病気で入院、治療を受けなければならなくなった子どもたちや保護者の皆様のご心配は、大変大きなものであらうと思われます。入院生活には様々な制約があり、お子さん本人だけでなく保護者やご家族の皆様も心配や不安を感じておられることでしょう。

私たちの学校は、高知大学医学部附属病院に入院をした子どもたちが、治療を受けながら学習ができるように、病院内に設立された特別支援学校です。

この冊子は、これまで附属病院分校で学習してきた子どもたちや保護者、兄弟姉妹の皆様にご覧いただき、入院中の思いを書いていただいたものです。

これから入院生活を送ることになる子どもたちや保護者の皆様にご覧いただき、不安や心配が少しでも和らぐものとなればと思ひます。

高知江の口養護学校高知大学医学部附属病院分校 教頭



Aさんの保護者より

息子が附属病院に入院したのは、中一の四月でした。元気印の息子が病気になるとは、本人はもちろん、家族皆が考えてもいないことでした。

長時間の手術を受け、その後、放射線治療や化学療法と入院生活は一年四か月に亘りました。

分校では、このうち一年三か月お世話になりました。病棟の掲示板で初めて分校のことを知り、不安な思いで七階へあがりましたが、行ってみると笑顔で対応してくれ、親切に学校のことを話していただき、わたしも気持ちが落ち着

きました。

初めて先生が病室へ来てくれた時、しんどさと退屈さでいつも横になっていた息子が、ベッドを起こして一緒にゲームを楽しんだことが、この間のこのようです。

分校での勉強は、一対一なので、親はありがたいことですが、本人にとっては、良い点悪い点があると思います。治療や体調の関係で教室に行けない時は、ベッドサイドで授業をしてくれます。最初は、来てもらうことが多く、すぐに疲れたりして、短時間から始めました。息子は、学校は好きですが、勉強に関しては「なんとかなる」精神で（先生方には申し訳なく…）宿題もやらないことが多く、たまにやっていると先生から「すごーい！」と拍手をもらっていました。

勉強以外にも、卓球やゲームをしたり、将棋を教えてもらったり、たこ焼きやケーキを作ったりと、体験したことのないことも多く、それがまた楽しみの一つでもありました。

治療だけ、勉強だけでも大変なことですが、ここで子どもたちはその両方をしています。先生方は、息子の状態や治療に配慮いただきながら、勉強はもちろん、心の支えになる声掛けや、辛い治療や退屈な病院生活を乗り越えられるよう、いろいろと手を差し伸べてくれました。

特に、担任の先生には、息子も遠慮なく気持ちをぶつけられ、親子共に本当にお世話になりました。私も、仕事や他の姉妹がいるため、また、自宅も遠いので付き添えない日もありました。そんな時、息子の病室をのぞいてくれたり、様子を知らせてくれたり、離れていても私も安心して過ごすことができました。

金環日食の日は、早朝にもかかわらず、病院で一緒に見てくれたり等、親身になって接してくれました。

退院後のことも教頭先生からアドバイスをいただき、交流学习として地元中学校で友達と一緒に遊び、学ぶ機会も作ってくれました。

今、その中学校に通っています。体力的にまだ皆についていけませんが、日ごとに友達との距離が近くなっているようです。そして、生徒への熱い思いも、分校からそのまま今の中学校の先生方にも伝わっている気がします。

退院から一か月が過ぎて、体育祭がありました。みなさんのお蔭で本人も今出来ることをしようと、百メートル走に参加しました。距離を短くしてもらいながら、友達と一緒に頑張っていました。

分校は、わたしたち家族にとって、前向きな気持ちを持たせてくれる希望の学校です。



Bさんの保護者より

息子が生まれて初めての入院生活を過ごしたのは、3年生の新学期すぐのことでした。検査が続き、毎日、日記をつけながら、先が見えない病状に不安を

もっていましたが、病状が落ち着いてくると、母は欲が出てきます。『3年生の勉強はどこまで進んでるのかな？』ほんのこの間まで元気になってほしいだけ思っていたのにね…。ハハハ…。

分校に入ると、ちょうど3年生の同級生が通っていて、息子もだんだん学校に通うことが楽しくなってきたようでした。時には、友達が病室に迎えに来てくれ、学校から帰ってきても「一緒に宿題する約束した！」とうれしそうにまた出て行ったり。学校に行っている間、私には少し自由な時間ができ、帰ってくると“お母さん先生”として宿題を見、入院生活にはりが出てきたのを感じました。もとの小学校に通うようになった時、自分の方が算数ドリルが進んでいたことで、自信をもって学習に取り組めたように思います。

1か月という短期間でしたが、通学できたのは、先生方と病気と闘いながら学習している友達のおかげです。ありがとうございました。



Cさんの保護者より

高知江の口養護学校高知大学医学部附属病院分校教職員の皆様、入院中は大変お世話になりありがとうございました。

恥ずかしながら、入院以前は、このような学校が院内にあることを知らず、入院後に紹介していただく形で知ることになりました。当初から、一か月という期間を考えた時に、学習の遅れを心配しておりましたので、すぐに内容について確認をさせていただきました。分校の皆様はじめ、本校の先生方にもご協力いただき、通学させていただくこととなりました。

手術後、間もなく、お世話になる事が決まったわけですが、術後ということもあり、痛みや自分で動けないもどかしさ、また、睡眠が十分取れないで朝を迎えるため、気分も優れず、かかわっていただいた先生方にはご迷惑をお掛けしたことと思います。しかしながら、体調が徐々に戻るにつれ、気持ちの部分でも安定してきました。また、分校の先生方の温かいご指導により、本人の気持ちも和らぎ、学校に行くことが楽しくなっているように感じました。私自身、実際に授業の様子等を見ることはできませんでしたが、本人の表情や、会話の中でそのことを感じることができました。

術後、間もない時期には、動くことができないということで、病室まで来ていただき指導いただけただけなこと、また、学校と同じような時間割を組んでいただくことで、生活の中にもリズムが確立され、入院期間を過ごすことができたと思いますし、そのおかげで本校復帰後もスムーズに学校生活を送ることができ、現在に至っています。今は、大好きな部活動復帰を目指し、日々、リハビリに取り組むとともに、慣れないバス通学をしながら、友達に囲まれた、笑いの絶えない学校生活のありがたみを感じ、生活を送ることができているようです。

入院という状況に置かれながら、このような環境を与えてくださったことに

対して、改めて感謝するとともに、先生方に対し、厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



Dさんの保護者より

約二か月の入院でしたが、入院中は分校の先生方に大変お世話になりました。

分校への転入手続きをしたものの、本人は本当に大丈夫だろうかと不安だったようで、はじめの頃は、行きたくなくて休んでしまったこともありました。そんな時には、すぐに先生が見に来てくれて話を聞いてくれたり、心配なことは何でも相談に乗ってもらえて、だんだんと不安も和らいでいき、いつの間にか毎朝分校に行く時間を楽しみに待つようになっていました。

分校での勉強は、ほとんどの時間が先生とのマンツーマンで、一人一人に合わせた授業だったので、とても分かりやすかったようです。その日の体調に合わせて、休憩しながら授業を進めていただいたりして、無理なく授業を受けることができました。

学習の範囲も、入院前にいた学校と連携を取り合って進めていただき、遅れていた分の勉強も追い付くことができました。また、退院の時には、元の学校への引き継ぎもしていただき、退院後も困らないよういろいろと配慮していただきました。

勉強以外にも、課外活動でw i iをしたり、ALTの外国人の先生とお茶をしたり、授業の合間の休み時間には、他のお友達や先生方と一緒にゲームをしたりと、いろいろと楽しい経験をさせていただき、分校での毎日がとても良い思い出になりました。

退院して元の学校に戻ってからも、「分校の方が良かった」といつも言っています。先生方には、いつも優しいだけでなく、時には厳しく真剣に子供と向き合ってご指導していただき、本当に感謝しています。どうもありがとうございました。

今でも通院の際には遊びに行かせていただいています。お忙しい中、いつも笑顔で優しく迎えて下さり、ありがとうございます。まだしばらく通院は続くと思いますが、これからもどうぞよろしくお願い致します。



Eさんの保護者より

体調不良で外来診察後に急な入院となり、二日目に病気の告知と今後の説明を受けました。入院生活は約半年間と医師から伝えられました。その時出た息子の言葉は、「修学旅行に行けんなる…」でした。私は、病気や治療ではなく学校行事に参加できないことの方が、この子にとって大きいのか…と少し驚きましたが、それだけ学校が好きで友だちが好きなのだということに気づかされ

ました。

分校で学習することに対しては、最初、息子は否定的でした。知らない先生や、知らない学生、知らない教室での勉強は、不安や戸惑いがあったのだと思います。勉強より治療に対する不安や恐怖心の方が大きくて当然だと思っていたので、ここでもまた驚かされました。治療や検査に対する不満というか、弱音といったものはいっさい言わなかったのが、本当に偉かったと思っています。

私は、正直なところを言いますと、勉強なんてどうでもいい、学校も嫌なら無理に授業を受けなくていいから、1にも2にも治療を優先してもらいたいと願っていました。親の気持ちとしては当然だと思っています。当初は、分校は、元の学校に戻る為に遅れをとらないように勉強するだけの場所、という程度にしか私も考えていませんでしたし、重要視していませんでした。けれども、次第に分校での出来事や、分校の先生の話題が息子の雑談の中で増えていき、最終的には話のできる友達もでき、分校が、息子の思う「学校」になっていたと感じるようになりました。実際、退院前には「元の学校にかえるのが嫌になってきた…」と言うようになっていました。

これから夏休みも終わり、きっと息子は、不安を感じながらも、元いた学校に慣れ、元のように友達と学び、遊ぶことができると思います。けれども、分校で学んだ半年間も、彼の中ではきっと忘れられない、いい経験になっている事だと思います。今後、もしも、また、入院することになったとしても、安心して学べる場所だと私も感じていますし、息子もそうだと思います。半年間、本当にお世話になりました。



Fさんの保護者より

突然の入院生活の始まりは、私たち親にしては自分を見失うほど辛い日々の始まりでした。今思えば、何もかも冷静に受け止めていたのは、息子だけだったなあと感じています。

息子は、最初、とても強く分校を拒絶しました。「今、行っている学校で勉強するからいい」と。

でも、検査、検査の毎日の中、二年先の受験は、彼にとって頭から離れるものではなかったようです。二年先の自分の未来を頭に描いた時、欠席日数のこと、勉強が解らなくなっていくことが、どれほど自分の進みたい道を狭くするのかを自分なりに考えたようです。「自分の願う学校で、自分の好きなことを好きなだけしたい」、その思いがあったからこそ学校に行くことを決め、こつこつ頑張ることができたのだと思います。どんな状況にあっても、どんな環境にあっても、「負けたくない」という思いが途切れなかったことが、彼の一番の薬だったと思います。それは、無論、先生方が熱心に彼にとって今一番良い環境を作り出してくださったからだと感じております。

学校がなければ、ベッドの上で何を思っただけで一日を終えていたでしょう。「家庭

科で初めてミサンガを作った。めっちゃ楽しかった。」と笑いながら帰って来た顔を見て、親子で泣きながら笑い合ったことを思い出します。

学校の先生方、病院の先生方等、いろんな方に可愛がっていただきました。もとの生活に戻っても、皆さんから大事にしてもらって、ゆっくりと生活しております。

これから、彼の未来は、永く続きます。その中で、今回得たものを大切に感じて成長していってくれることを願ってやみません。

息子に温かい居場所を作ってください、ありがとうございました。

また、2か月間ではありましたが、息子を育てる力を私にお貸しくささいまして、ありがとうございました。



Gさんの保護者より

中二の三学期早々の、突然の入院でした。あんなに元気だった息子が病気になるとは思ってもみませんでした。

本人は、「病気のことより、学校に行けなくなること、部活動が出来なくなることが一番嫌。」と言って、元気がありませんでした。検査、検査…の毎日で辛かったと思いますが、分校に通い始めてからは、友だちもでき、勉強も前の学校と連携を取り合って進めていただいたので遅れることもなく、一对一の授業で苦手な教科も分かるようになり、良かったです。

家庭科で、ミサンガを作った時は、「すごいやろう！」と、嬉しそうに見せてくれました。また、卓球やゲームをして、だんだんと笑顔が見られるようになりました。

約三か月の入院生活でしたが、良い思い出になりました。

本当にお世話になり、ありがとうございました。



Hさんの保護者より

私たちが高知大学医学部附属病院で、お世話になったのは、息子が中一の夏休み後半からでした。突然の入院で、四万十市から急遽ドクターヘリで来て、知らない人達の中で親子共々、不安の日々でした。

二十四時間ぶっ通しの点滴、そして検査の日々が続き、二学期が始まろうとした時に主治医の先生から「病院内に学校があります。入院がしばらくかかるので、学校に行くようにしたらどうでしょう。」と話がありました。息子と話をし、地元の中学校からこちらの分校に転校手続きをし、二学期から通うようになりました。

分校の先生は、教頭先生をはじめ、いい先生ばかりで、どれだけ励まされたことか…。感謝しています。徐々に息子も病院や学校生活に慣れて、笑顔を見

せてくれるようになりました。

九月に入って、十時間もかかる手術も無事に成功して、それから順調に回復に向かいました。

手術の日も、分校の先生方がとても心配してくれて、何度も病室に足を運んで来てくれたことが、とても嬉しかったです。本当にありがとうございました。

もう少しで高知大学医学部附属病院を退院します。まだまだ息子は、歩行訓練のリハビリを頑張らなければなりません、きっと頑張ってくれることだと思います。私たち家族は、これからも息子をサポートしていきます。

今までお世話になった病棟の先生方、リハビリ室の先生方、看護師さん、助手の方々、そして分校の先生方、ありがとうございました。息子の笑顔がまた見れるようになり、感謝の言葉を何度言っても言い足りないくらいです。病院生活の中で色々な人たちに出会って色んな経験もして、勉強になったことがありましたが、それを活かして頑張ります。これからまた、困難な壁にぶつかる時が来ると思われますが、その時はきっと、ここでの病院生活や皆さんの顔を思い出すことでしょう。

分校での勉強は、四十日間とあっという間でしたが、週に一度の自立活動の授業は、息子にとっては気分転換ができて楽しい時間だったようです。やはり、分校ならではのですね。

新しい学校に慣れるまでは、少し時間がかかると思われませんが、持ち前の明るさで溶け込んでくれることだと思います。最後になりますが、本当にありがとうございました。



Hさんより

この分校での授業で一番思い出に残っているのは、自立活動です。なぜなら、先生や同じ学年の人とボードゲームやトランプをしたからです。その中でも一番おもしろかったのは、人生ゲームです。一着になってお金をいっぱいもらえたからです。

次に思い出に残っているのは、一対一で授業を受けたことです。前の学校では、一対二十八で授業を受けていたので、少しわかりにくいところがあっても先生に聞けなかったことがありました。しかし、ここでは一対一で勉強をしたので、分からないところやわかりにくいところを先生が教えてくれたので、理解できました。

授業以外では、休み時間に先生とオセロやダイヤモンドゲームをしたことも思い出です。オセロもダイヤモンドゲームも先生が強くて勝てませんでしたが、楽しかったです。

また、診察のためにこの病院に来ることがあると思います。その時は、分校に顔を出しますね。最後になりますが、約一か月間、ありがとうございました。



Iさんの保護者より

入院当初は、親子で心身ともに疲れきっていました。それなのに、いつまでかかるか分からない入院に学校へ行けない不安も大きくて…でも、江の口養護学校分校のことを入院した初日に教えていただき、心から喜びました。治療しながら勉強を教えてもらえて、更に、退屈な病院での生活の中で遊びの相手もしていただき、感謝しています。入院中は、7階の学校に通うお友達が他になくて、毎日、先生とマンツーマンの授業でやりたい放題だったと思います。同時に、お友達のたくさん通う元の学校の楽しさも実感できたのではないかと思います。子どもの勉強と遊びだけでなく、母親である私の悩みや相談を教頭先生にはたくさん聞いていただきました。本当にありがとうございました。

私たち親子にとって大変な入院生活でしたが、たくさんの方に支えられ、笑顔で過ごせるようになりました。この経験を力に、これから頑張っていきます。お世話になりました。



Jさんより

私は、この学校で楽しかったことが、二つあります。

一つ目は、やはり自立活動です。すぐろくで「自分以外の人を5マス戻す」というのがありました。

みんなより前に進んでいた一人の先生がみんなに戻されて、結局、一番最後になっていたことがあり、おもしろかったです。

二つ目は、体育で本校のS先生と一緒に卓球をしたことです。最初は、あまりラリーが続きませんでした。だんだんと上手になってきて、最近は十回以上、ラリーが続きました。それから、すごく速い球を打てるようになって、S先生に勝つようになったことも嬉しいことです。

元の中学校に戻っても勉強を頑張ります。



Kさんより

私は、体調が悪くなってしまい、病院で医者に診てもらおうと一か月間の入院が必要となってしまいました。

しかし、学生ということもあり、学校の授業に遅れが出てしまう…、その遅れを取り戻すのにすごく時間がかかってしまうのではないかと…等の不安がありました。

そんな時に病院の看護師の方から、病院の中にも学校があるという話を聞いて通うこととなりました。

分校の授業は、人数が少ないということもあり、一対一のまるで家庭教師のような感じでしたので、分からないことがあればすぐに聞ける分かりやすい授業でした。

しかし、私以外にも同年代の生徒もおり、一緒に様々な取り組みができましたので、楽しく過ごすことができました。

この度入院することになった方も、慣れない入院生活で、不安が山ほどあるでしょうけれど、心配することはないと思います。



Lさんより

僕の分校での思い出は、自立活動の時間にゲームをしたことや家庭科でミサングを作ったりしたことです。

特におもしろかった授業は、体育です。僕は、運動制限があるので、体育は運動ではなく勉強かな？とっていました。しかし、先生が、「卓球をします。」と言ったので、びっくりしました。卓球をすることについては、少しの時間、椅子に座ってすることに限って、主治医から許可が出ていたのです。

まず、ピン球をラケットで打つラフティングから始めました。次に、ラケットを裏返ししながら、交互に 十回、三十回、五十回…と連続して打つ回数を増やしながらラフティングをしました。

休憩をはさんで、「なぜ、ピンポン玉にスピンをかけることができるのか？」その方法を教えてもらいました。スピンの仕組みが分かり、感心しました。

最後には、ゲームをしました。ラリーが続かないので、先生が「緊張せずリラックスして！」と声をかけてくれ、嬉しかったです。体育の時間は、あっという間でした。

分校で勉強したのは1か月足らずでしたが、先生方のおかげで楽しく過ごすことができました。しかし、もう入院することは嫌なので、これからは、毎日、薬を忘れずにしっかり飲んで、病気が治るまで頑張ります。



Mさんの保護者より

一度目の退院後、経過も良く安心した途端、急に二度目の入院となりました。

自覚症状がなかった息子は、病室で私と二人になると大泣きしていましたが、分校への転入等、一度目と変わらない慣れた環境にすぐ戻ったためか、思ったより早く気持ちは落ち着きました。ただ、前回の入院とは違い、今回は、高学年。本人は、相変わらず治療と同じくらい勉強が嫌い。いったいどうなるのだろう…と親としてしては不安でしたが、分校では常にいつでも地元の学校へ戻れるよう指導してくださったので、とても心強く思いました。

勉強以外の息抜きには、極力本人の希望を取り入れた将棋、ゲーム、料理、

手作り品等、楽しむことができました。中でも両親ができない将棋が強くなってきた時には、病室に来る全ての人に長〜い自慢話を嬉しそうにしていました。

こんな風に親から見ればいつまでも小さな子どものままに思う息子ですが、私が学校以外のこともいろいろ相談にのっていただいたように、息子も私に言えないことを先生方には話していたようで、その都度、本当の親よりも親らしく、兄弟よりも兄弟らしく、時には友人のように接してくださり、精神的にも随分成長し、大変感謝しています。

今後も、分校に縁のある全てのお子様、充実した楽しい生活を送れますようお祈りいたします。



Mさんの姉より

入院中の事、いろいろ学校でフェルトのポンポンやコースター等、いろいろな作品を作ったようで、それをもらった時はうれしかった。

地元の小学校ではできない珍しい体験をたくさんしているようだ。

母親は知らなかったけれど、分校の先生からの情報によると、長期間会えていなかったのに、私の想像以上に私は弟から畏れ敬われていたらしい。

世の中の姉弟ってこんなもの??

喧嘩もできない為か、『姉、大好きっ子』になっていた。かわいい奴!!

些細なことで怒りすぎた…。

(姉：激怒→弟：平謝りというパターン)

もっと優しくすれば良かった…。

「子どものお見舞いは、ダメ」と言われていたが、もっと行きたかった。

